



「旧音声学研究施設」千葉勉  
(上智大学・国際言語情報研究所・音声学研究室所蔵)

東京外国語大学文書館企画展

# 「千葉勉と東京外国語学校音声学実験室」

戦前の東京外国語学校には世界水準の音声学実験室がありました。実験室の責任者を務めた千葉勉は、音声学研究に物理学の導入を進め、実験室には世界最先端の装置が設置されていました。

昨年、千葉勉のご遺族及びロンドン大学(UCL) Michael Ashby 教授より「千葉勉関係資料」の寄贈を頂きました。

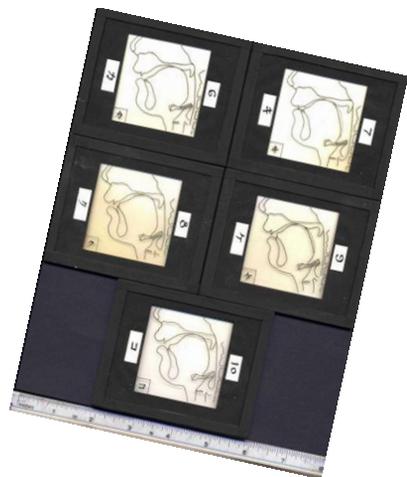
本企画展では、そうした寄贈資料を中心に、戦前の世界水準の音声学実験室と千葉勉の業績について紹介します。

◆展示期間：2017年2月22日(水)~3月末

◆展示場所：附属図書館1階展示スペース

※開館時間については附属図書館開館時間をご確認ください。

【右】約80年ぶりに帰還する口腔図ガラス板



# 「戦前にあった世界水準の 音声学実験室」

## 1. 千葉勉(1883年-1959年)略歴

1907年東京帝国大学文学部英文学科卒業。1913-16年文部省より英国に派遣(留学)され、ロンドン大学(UCL)にて当時世界的な音声学研究の第一人者であった音声学研究を進めていたDaniel Jonesの授業を受講。帰国後、東京帝国大学講師と東京外国語学校講師を併任し、1919年から東京外国語大学教授に就任します。約30年に渡り戦前の東京外国語学校英語部を牽引するとともに、1928年には文部省特別予算を獲得し翌年日本で2番目となる音声学実験室を設置し、世界水準の音声研究を進めました。同実験室での研究成果を踏まえた『母音論』(The Vowel, Its Nature and Structure. Tokyo-Kaiseikan, 1941)は、今日に至るまで言語学・音声学の古典とされています。1945年、同校を定年退職した後、1950年より上智大学教授に就任し、同大学において音声学実験室を創始しました。

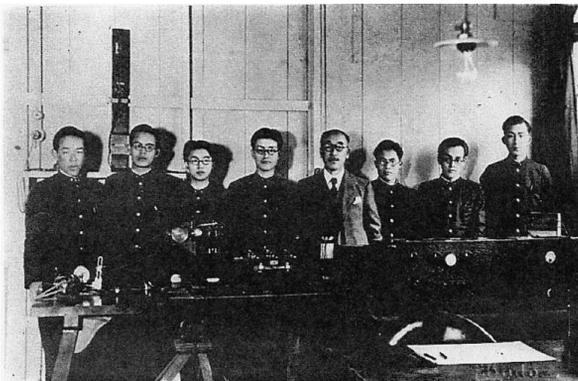


音声学実験室において千葉勉

## 2. 東京外国語学校音声学実験室

1929年当時、東京外国語学校は皇居の外堀、麴町区竹平町に位置していました。「(音声学)実験室は木造の細長い校舎の東端にあり、廊下を含めて東西に四間、南北に九間半の大きさがありました。南から北へ千葉教授室(七・五坪)、X線室(四・五坪)、防音室(四・五坪)、実験室(一四坪)、暗室(二坪)の順に並んでいました」(梶山正登「千葉先生と旧音声学実験室」『千葉勉の仕事と思い出』参照)。

実験室にはX線撮影装置、カイモグラフ、マイククロフォン、電磁オシログラフなど世界最先端の技術水準の機材が並んでいました。その他、「防音室などは狭いながら殆んど完全なもの」があったと言います。当時、最先端の研究機材であったため、日本放送協会が録音機の貸与の申込があったと言います。



東京外国語学校音声学実験室において千葉勉(右から4番目)と学生たち(1930年頃)